

十勝岳の火山活動解説資料（令和7年1月）

札幌管区气象台
地域火山監視・警報センター

62-2火口、振子沢噴気孔群及びその周辺では引き続き噴煙・噴気が多く、熱活動が活発な状態が続いています。今後の火山活動の推移には注意が必要です。
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1-①～⑤、図2-①～③、図3）

監視カメラによる観測では、62-2火口の噴煙は2021年頃から高い状態が続いており、今期間の噴煙の高さは火口縁上概ね300m以下で経過しました。大正火口の噴気の高さは100m以下、振子沢噴気孔群の噴気の高さは稜線上100m以下で経過しました。振子沢噴気孔群の噴気は2018年頃からやや高い状態が続いています。

・地震及び微動の発生状況（図1-⑥～⑨、図2-④～⑥、図4～6、図7-①）

火山性地震は少ない状態で経過しました。震源は主に62-2火口付近のごく浅い所、旧噴火口付近のごく浅い所及びグラウンド火口付近の深さ0km～深さ1km付近に分布しました。

17日に振幅が小さく継続時間が短い微動を観測しました。

・地殻変動の状況（図7-②～③、図8、図9）

27日の火山性地震と同期して、主に62-2火口の周辺の傾斜計で62-2火口方向がわずかに下がる傾斜変動が観測されました。2018年以降、62-2火口付近の地震や火山性微動と同期した傾斜変動が時折観測されています。

GNSS連続観測では、2021年以降に山体浅部の収縮傾向を示す地殻変動が観測されていましたが、2022年以降次第に鈍化し、2024年秋以降は概ね停滞しています。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和7年2月分）は令和7年3月10日に発表する予定です。

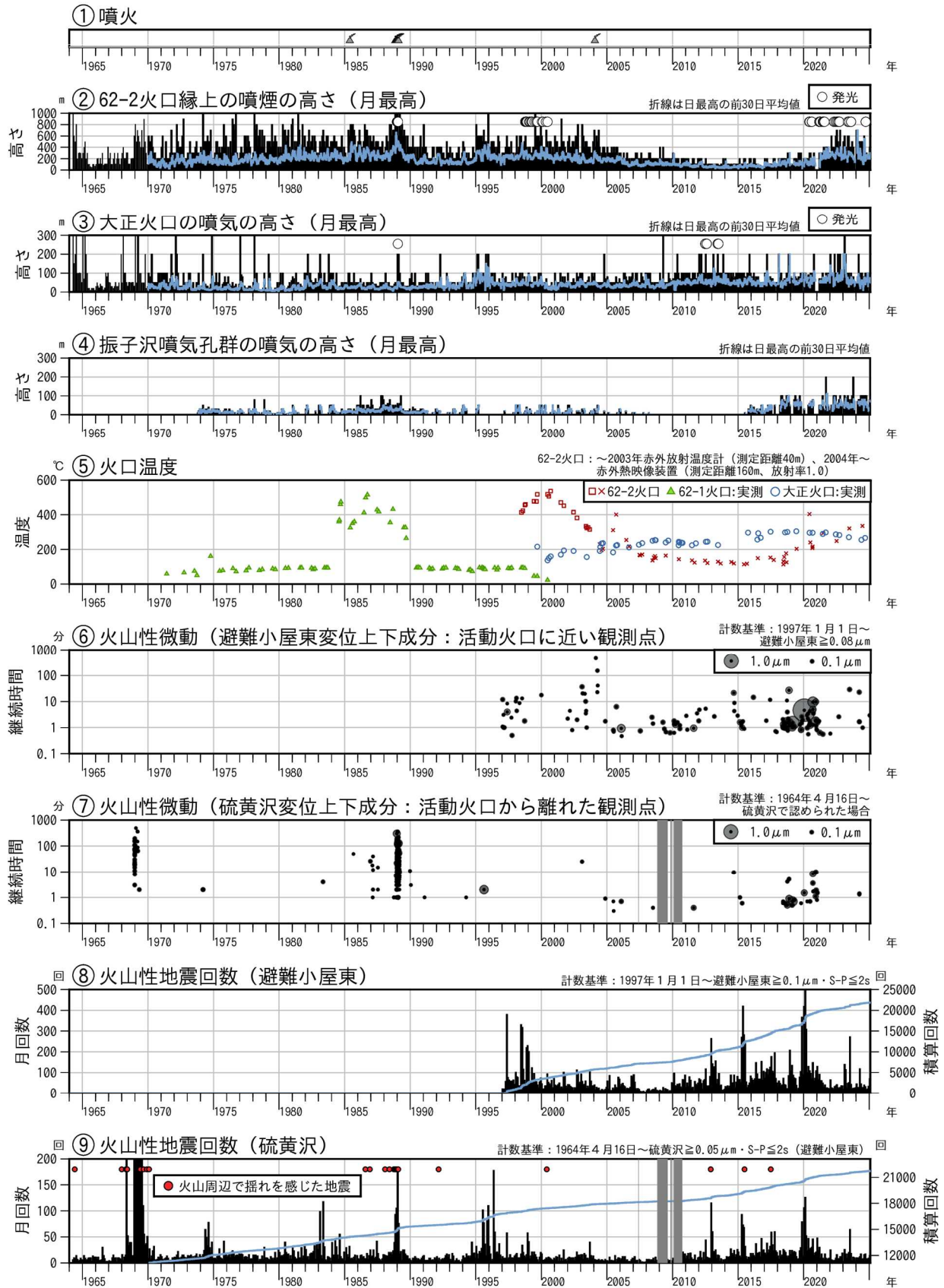


図1 十勝岳 火山活動経過図（1964年1月～2025年1月）

⑤の62-2火口及び大正火口の温度は、北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び産業技術総合研究所のデータを含みます。

⑦⑨の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

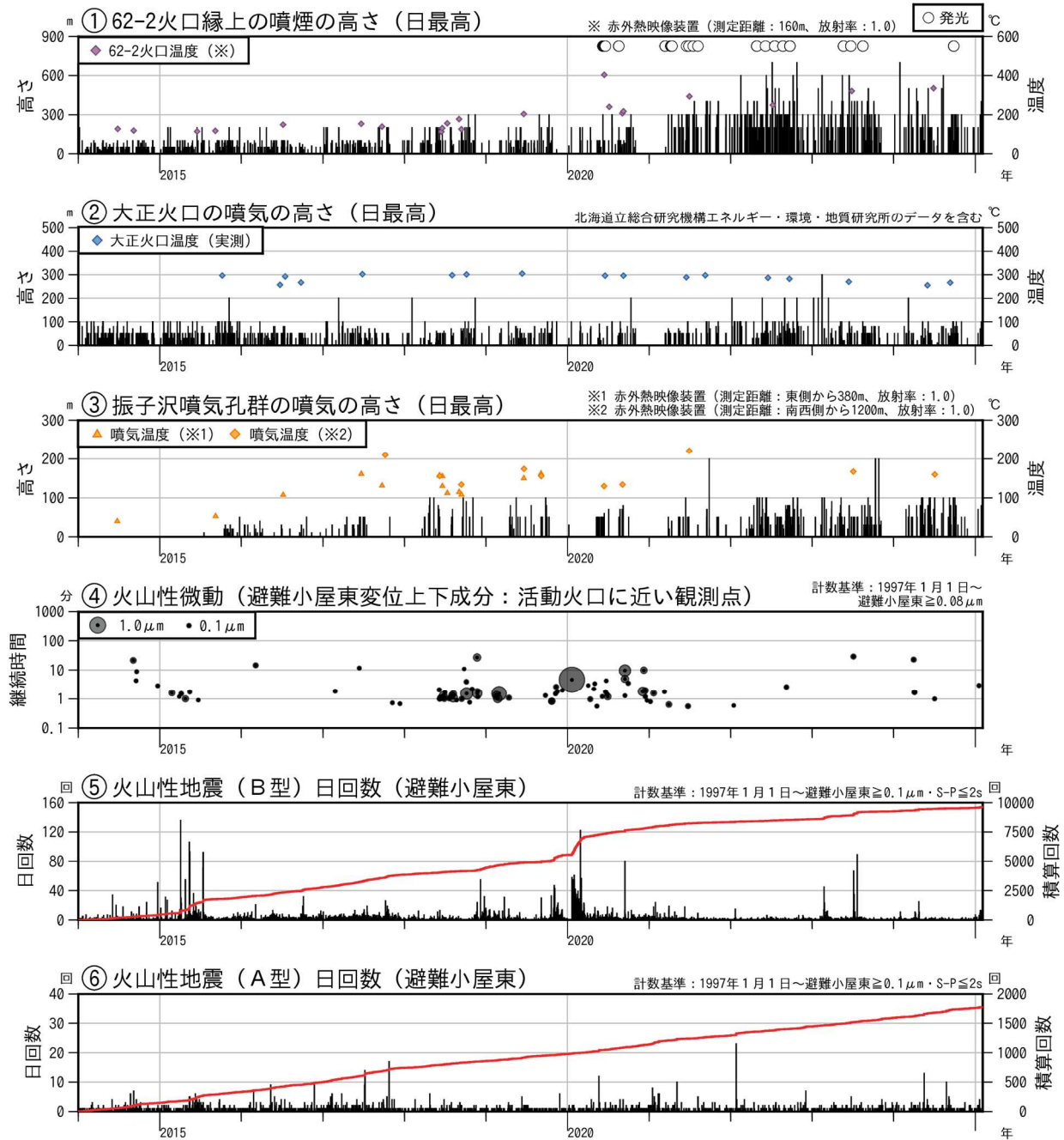


図2 十勝岳 火山活動経過図（2014年1月～2025年1月）

⑤は主に62-2火口付近のごく浅い所（図4参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、⑥は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。

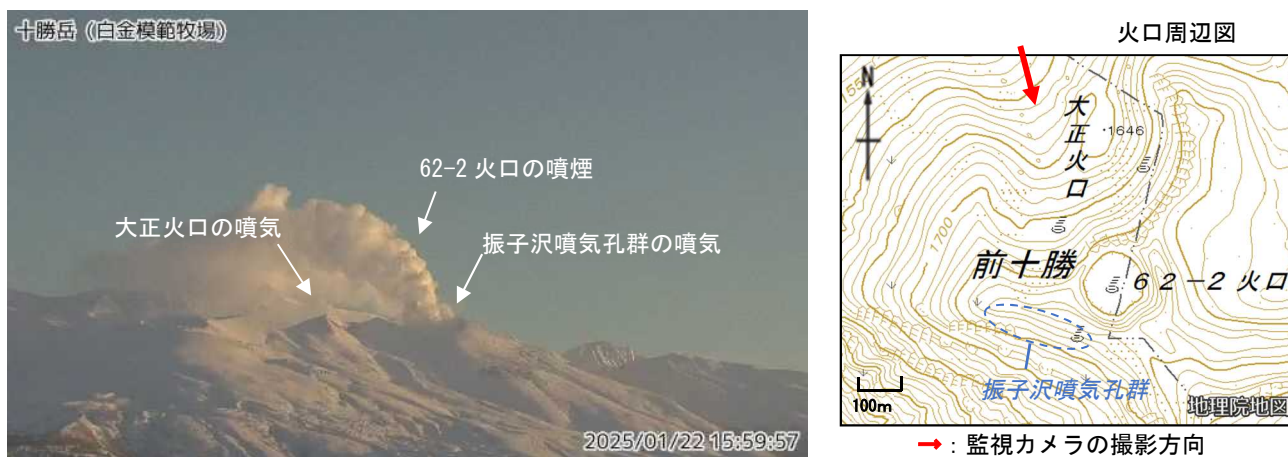


図3 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況（白金模範牧場監視カメラによる）及び火口周辺図

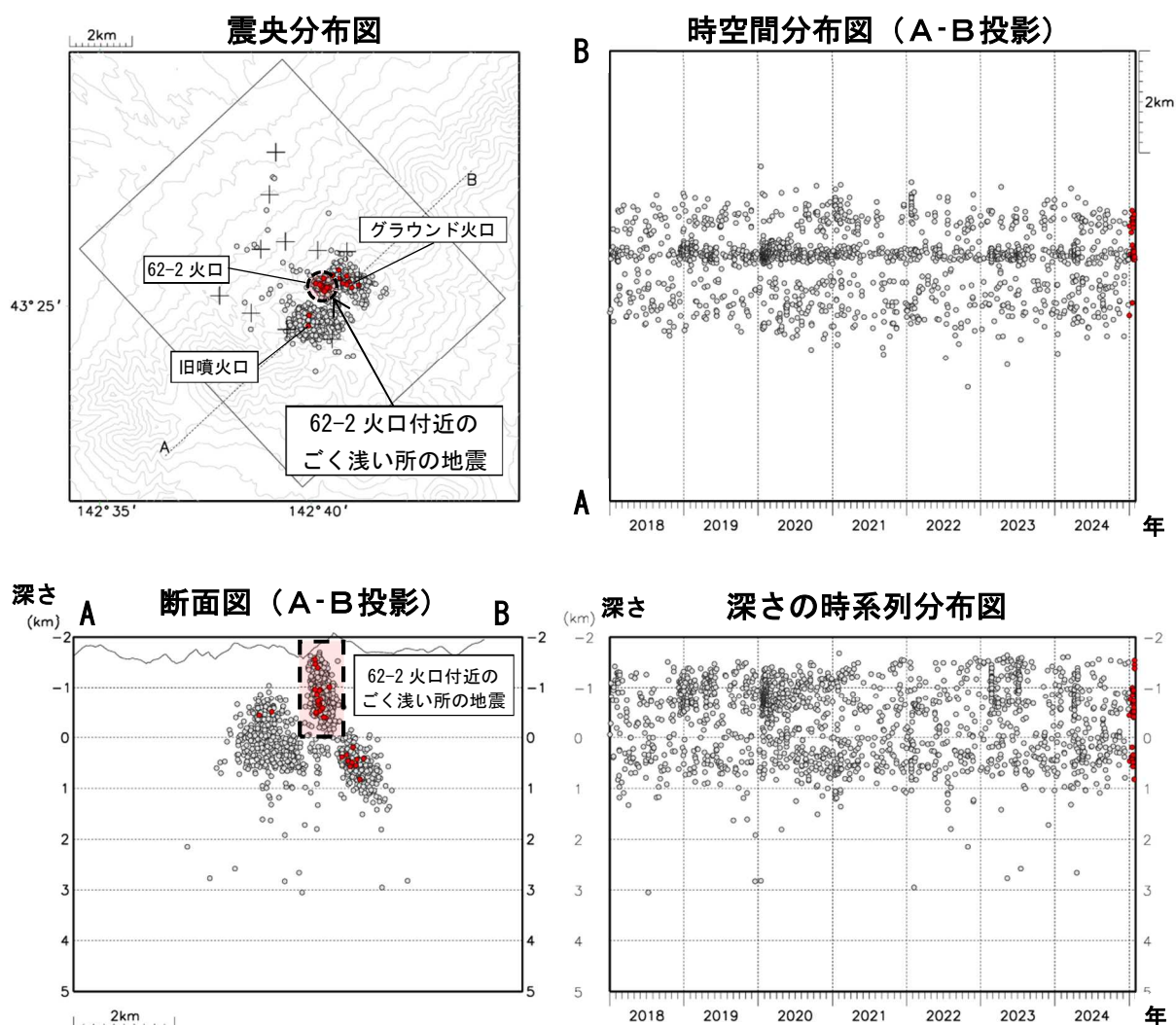


図4 十勝岳 火山性地震の震源分布（2018年1月～2025年1月）

●: 2018年1月～2024年12月の震源 ●: 2025年1月の震源 +: 地震観測点

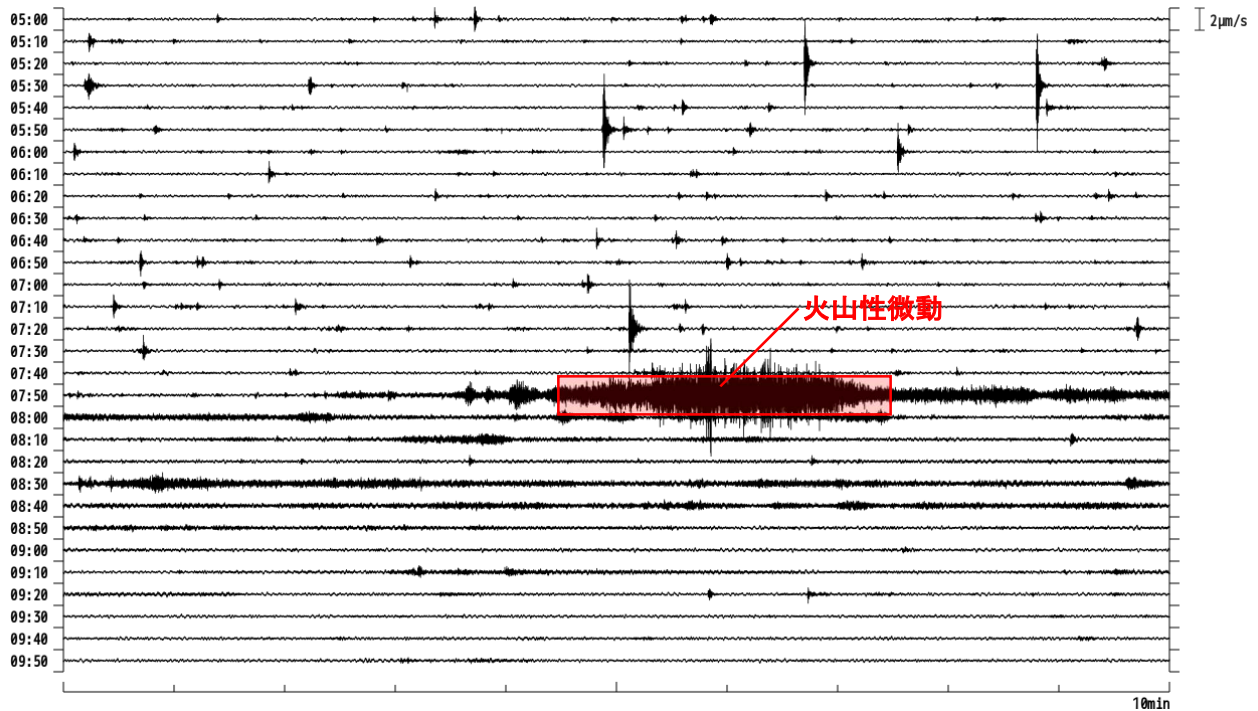


図5 十勝岳 避難小屋東の速度波形上下成分（1月17日05時00分～10時00分）

- ・17日07時54分頃から継続時間が短く、振幅の小さな火山性微動が観測されました。火山性微動の発生前後に、火山性地震の発生状況等に特段の変化は認められませんでした。

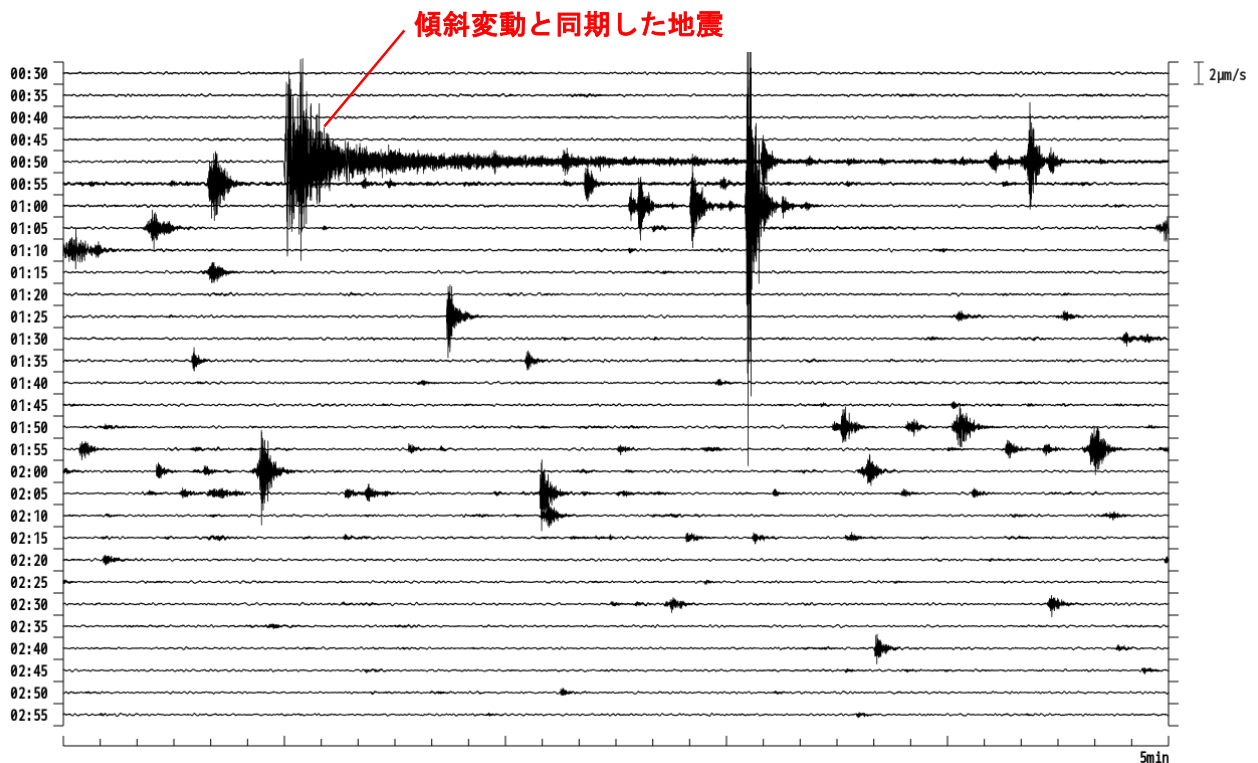


図6 十勝岳 避難小屋東の速度波形上下成分（1月27日00時30分～03時00分）

- ・27日00時50分頃に発生した62-2火口付近のごく浅い所の地震と同期して主に62-2火口の周辺の傾斜計で62-2火口方向がわずかに下がる傾斜変動が観測されました（図7参照）。
- ・傾斜変動の発生前後に、火山性地震の発生状況等に特段の変化は認められませんでした。

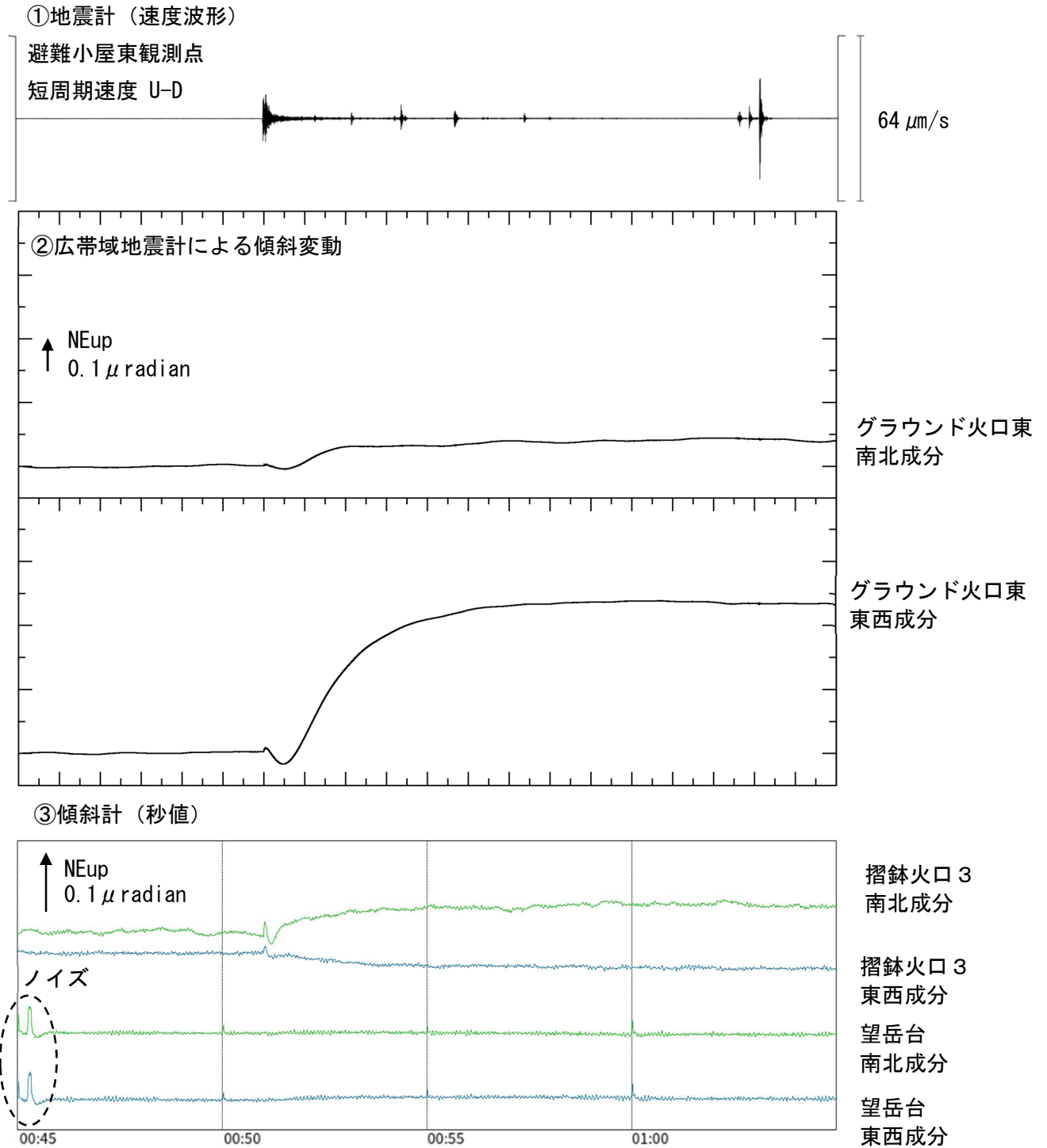


図7 十勝岳 1月27日に発生した火山性地震と同期した傾斜変動（1月27日00時45分～01時05分）
②及び③はいずれも傾斜変動の推移を示していますが、観測機器の特性、サンプリング間隔がそれぞれ異なる事から、変動の開始や極値、鈍化のタイミング等の比較には留意が必要です。
・27日00時50分頃に発生した地震と同期して、主に62-2火口周辺の傾斜計で62-2火口方向が下がるわずかな傾斜変動を観測しました。

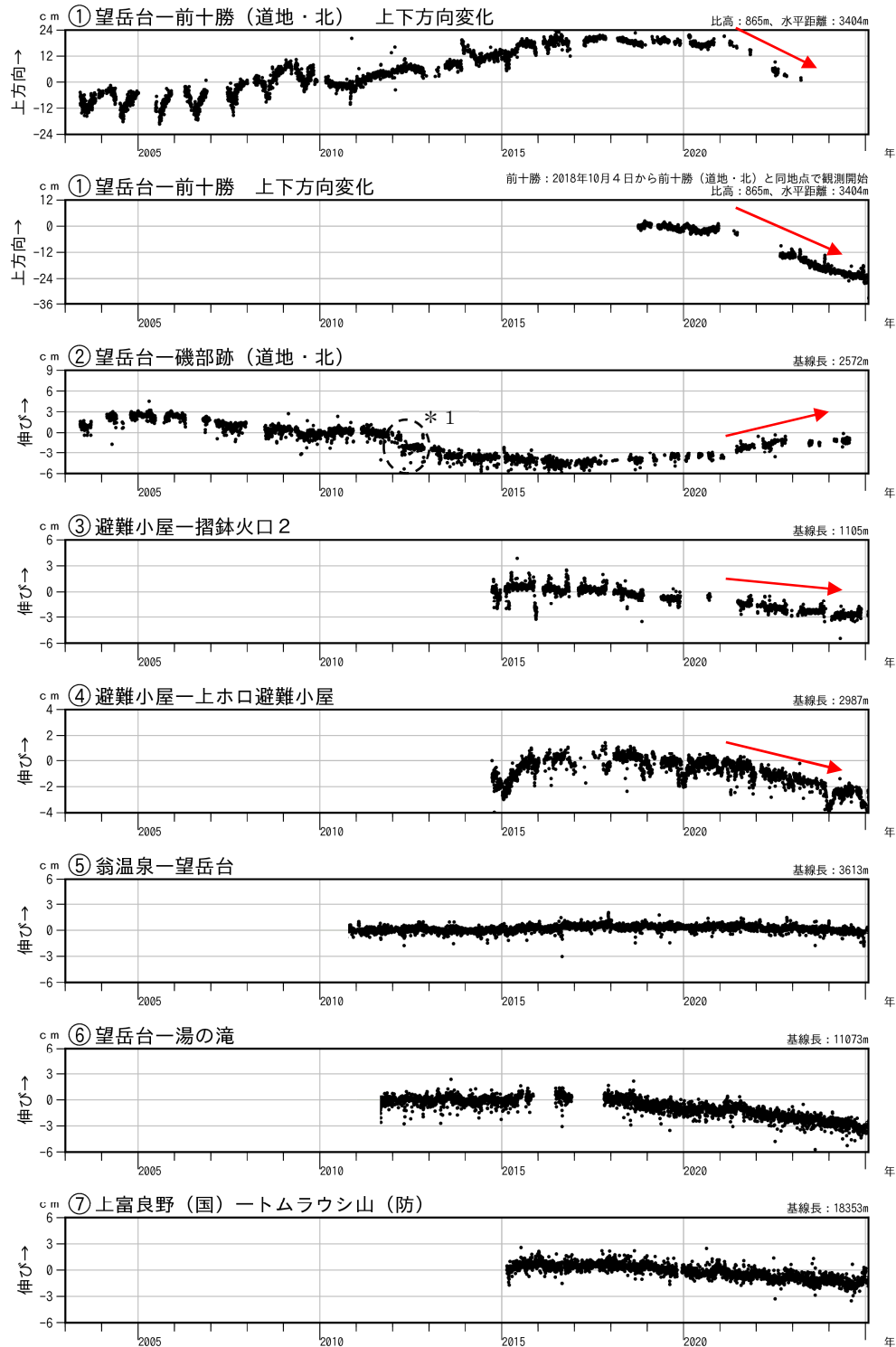


図8 十勝岳 GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化（2003年5月～2025年1月）

グラフ①～⑦は観測点配置図（図9）の基線①～⑦に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。

2010年3月の前後で解析方法が異なります。

* 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。

- ・ 基線①～④では2021年頃から山体浅部の収縮を示すと考えられる基線長の変化及び観測点の沈降（赤矢印）が観測されていますが、2022年頃からやや鈍化し、2024年秋以降は概ね停滞しています。ただし、62-2火口のごく近傍の観測点を含む基線①では、観測点付近の局所的な変形の影響も受けていると考えられます。
- ・ 基線⑥⑦では、2018年以降ごくわずかな短縮傾向が続いています。

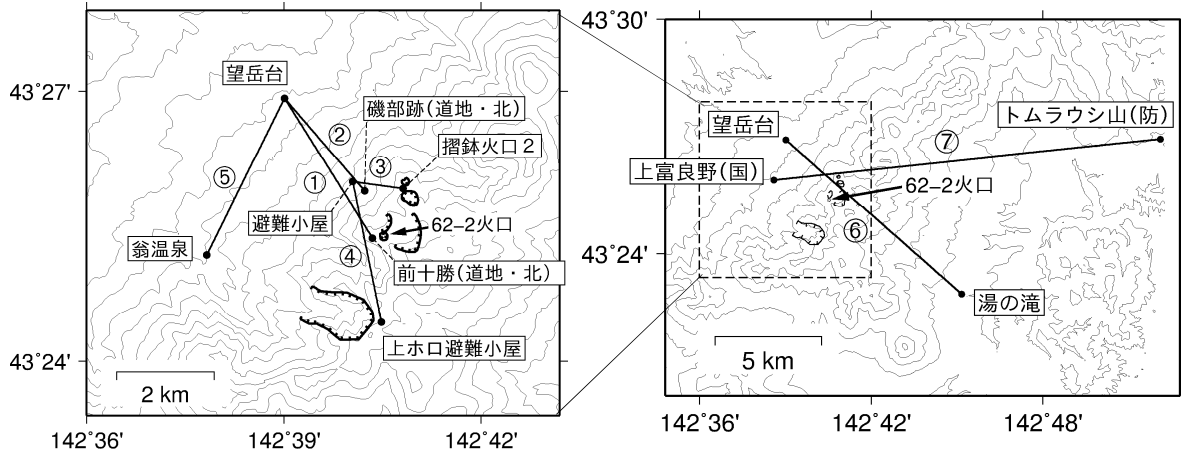


図9 十勝岳 GNSS連続観測 観測点配置図

図中の基線①～⑦は図8のグラフ①～⑦に対応しています。

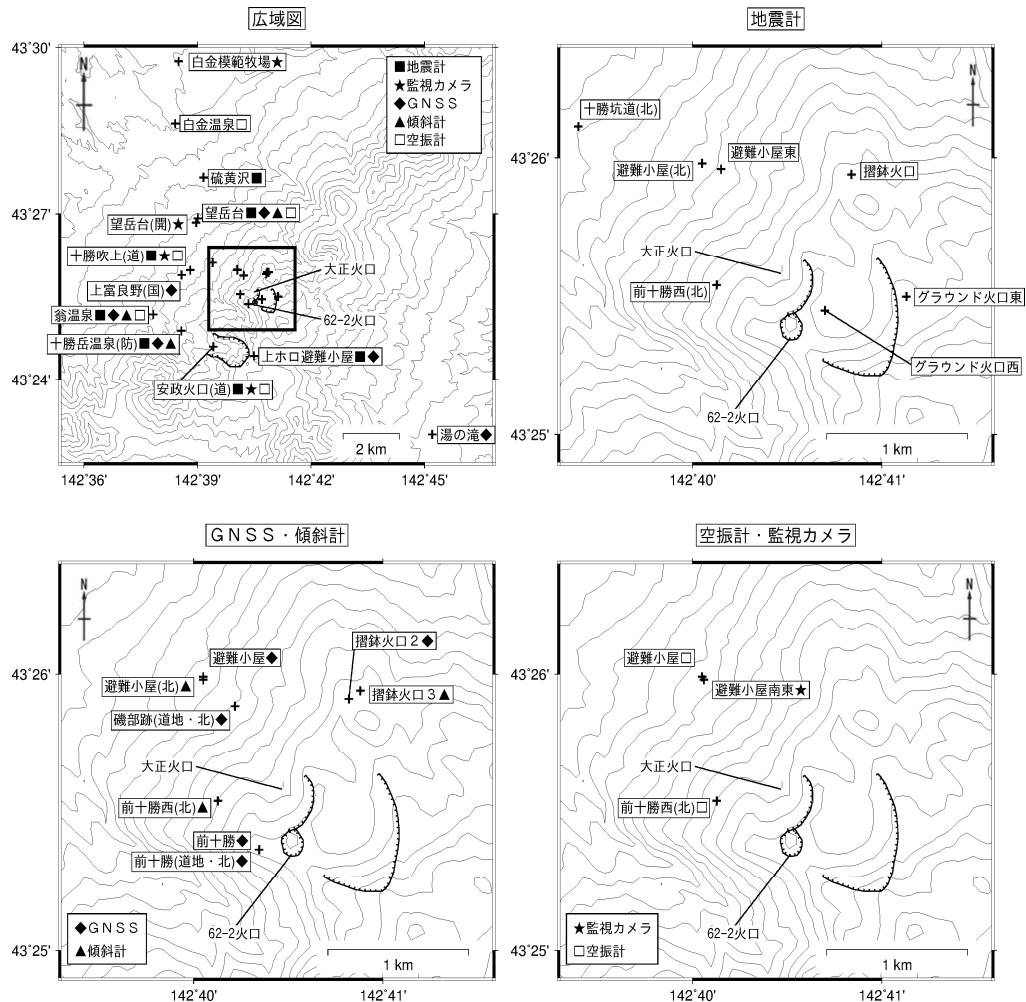


図10 十勝岳 観測点配置図

各機器の配置図は、広域図内の太枠線で示した領域を拡大したものです。

＋印は観測点の位置を示します。

気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。

(開) : 国土交通省北海道開発局

(国) : 国土地理院

(北) : 北海道大学

(防) : 国立研究開発法人防災科学技術研究所

(道) : 北海道

(道地) : 北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所